

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞 應 寺
印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【三】

— 普照の序 —

後堂 門 原 信 典

今回は碧巖録の序文の一つである、普照の序から読ませていただきます。

【金太郎飴】

皆さんは「金太郎飴」と云うお菓子をご存じだと思いますが、巻寿司と同じ作りで、どこを切っても切り口に金太郎の顔が現れる棒状の飴です。

堂頭老師の新年のご挨拶でいただいた「日常の茶飯にも三昧に修行することが肝要」とのお示しは、私たちの行住坐臥の生活の全てが佛様の日送りという事です。

「これは大切だけど、これはマアいい加減で良い。」という事は無い。スリッパをそ

「和尚のうどんの食べっぷりは、いつ見ても気持ちがいい。」うどんの食べ方は褒められたことが何回かあります。

「修行道場で音を立てて食べていいのはうどんだけですから。」と話すので、和尚さんはうどんが好物だと皆さん知っています。しかし、それが佛様の願いに叶っていると

自分に対しても他人に対しても、身と口と心の行いも、全てそこに佛様が現れるように生きて行かなければなりません。何故ならば、私共の成佛は、成佛道、佛道を成し遂げる、つまりは実践しかないのです。

佛様に護られていると言いますが、実は佛様が私の身体と心を借りて人間生活を送っているのです。ですから、頭

のてっぺんから足の先まで私の身体はどこを切っても金太郎ならぬ、佛様でなければなら

【普照の序】

では最初に出版された碧巖

録の序文「普照の序」から読ませていただきます。

至聖の命脈、列祖の大機、換骨の靈方、願神の妙術。

それぞれ四句で示されています。

【至聖の命脈——坐禪が伝わる】

佛様や祖師方が教え伝えて

こられた坐禪の事です。

「至聖」はお釈迦様。聖を「ひじり」と読みます。元々「日を知る」「日知り」の意味だそうです。が、太陽は神、絶対者。そこから万物に規範として完全な

人。神の声を聞きうる人、神聖で犯すことが出来ない清らかで尊い人、人間最高の理想像という事になります。

私達の立場から云えば、聖なる人の極みはお釈迦様です。それが佛様です。佛祖正伝と云いますが、お釈迦様から正しく伝えてこられた「命脈」とは何か？「命脈」は「慧命脈絡」の略です。佛様の根本の生命である慧命を相続して断絶する事の無い事。

私達の肉体は、先ず食物を以って生命とするのですが、佛道修行の身心は、智慧を持って生命とします。それが「慧命」です。この智慧と云

うのは頭の働きではなく、十重禁戒に示されている佛様の生き方です。そして、「禪戒一如」のお示しの通り、「戒」の実践がそのまま坐禪の働きとなります。是こそがこの碧巖録の生命なのです。

【列祖の大機——佛様の大きなはたらき】

お釈迦様の教えを伝えられたのが「列祖」。

祖は、物事の起源ですから、お釈迦様の事、その教えも含まれます。「列祖」はそれを代々伝えてこられた方々。お釈迦様の教えを、達磨大師様がインドから中国に渡られて、文字でも、言葉でも、思想でも、哲学でもない、ただこの身心で佛様の教えを示す坐禪を伝えられました。

最近病院に診察に行き、お薬をもらうと、必ずお薬の説明書が添付されます。そのお薬の説明書をいくら読んで

も、病氣は治りません。達磨大師様が中国に渡られる以前にも、佛教の經典は伝わっていました。しかし經典は佛道修行の説明書です。薬は飲まないと効かないよう

に、実践しなければ佛様には成れないのです。実践こそが「大機」。機とは、はたらき、いとなみ、作用の事。その大きなはたらきが碧巖録に満ち満ちているのです。

【換骨の靈方―私が変わる、世界が変わる】

これも坐禅のことです。「換骨」は元々中国の道教の言葉で、いわゆる仙人の術、金丹という妙薬で凡人の骨を仙人の骨にかえてしまう処方箋の事。

「換骨奪胎」と言います。「骨を取り換え、胎盤を奪い取って自分のものにする」一般的には、昔の人の詩の表現や発想などを基にしながら、創意工夫を加えて自分の独自の作品にする。或いは自分のものとすると云う意味ですが、ここは凡夫の私が、そのまま佛様になる靈妙な処方です。私の骨から骨組み、身体、心まで、今の言葉でいえばDNAまで、佛様だったのです。一寸坐れば一寸の佛様です。

骨と云うのは中心、真髓。この意識というより、生き方の換骨が何時出来るか？以前、大学を出たばかりの

和尚さんに、「これから、どこ

かに修行に行かれますか？」と聞いたら「はい、〇〇の修行道場に半年行つて住職の免許もらつてきます。」とあつて

らんと言われました。修行道場を教習所と勘違いされているのか、もちろん、そこから正しく導いていくのが師匠であり、指導者の大切な役目です。

「資格を取りに来た」「法事や葬儀の仕方を習いに来た」「師匠に云われて来た」それで終わらせない。そこから一歩も二歩も進んで、自分を超越えることが出来るか、大きな分かれ目です。

自分の思い通りの楽な修行など無いのです。自分の期待に外れることこそ真実です。こんなはずではなかった。こんな事は修行ではない。実はそれが自分の道心を育てていくのです。そこをどう受け止めて、どう努力していくか。それが出来ないとなれば生を救う事も、亡者を導く事も出来ません。私が換骨奪胎すれば世界も換骨奪胎するので。過去も未来も

変わるのです。

【願神の妙術―生命の不思議なはたらき】

それが願神の妙術。「願」は養う。「神」は、神さま佛さまの神ではなく、人知では計り知れない不可思議な働きです。

ですから「生命の根本にある靈妙なはたらきを養う」という意味ですが、どういう事でしょうか。

今こうして生かされている事の不思議さ。それが分からないと真実の安心は得られません。宇宙から始まり、太陽、地球、この大自然、衣食住、そして、人と人との出会いの全てに生かされている私。その生命をお互いに生かしていく。

全ての人々に真実の安心を与えるには、いつまでも私のわがままを相手にしては到底無理なお話です。

一切衆生という、この世界の全ての人に、全ての生命に通じる大切な妙術、その教えをこれから学んでいきます（続く）

テレホン法話（〇八九七）四一〇〇三三

禪のたより



死を見つめ 今を生きる

先日ラジオを聞いておりましたら、お笑い芸人の田村淳さんが出演されておりました。田村さんは多忙な芸能活動の傍ら、慶應義塾大学で勉学に励まれたそうです。

研究をされていたのは「遺書」。そして現在は、自分が亡き後に家族や友人など遺された方への動画のサービスを提供する会社を運営されておられます。

そのラジオの番組で私の心に響いたエピソードがありました。それは、子育て真最中の三十代のある女性のお話でした。

思い通りにならない子育てに疲弊しきつていたその女性は、ふとしたきっかけで田村さんの遺書の研究を知り、モニターとして参加され遺書を書くことになりました。

その女性は子育てに忙しく自分の時間も、心のゆとりがありません。ましてや、まだ若い自分の「死」と向き合うことなどなかったのでしょう。『自分がもし近いうちに死んでしまったら、我が子はどうなるのだろうか、子供の成長を見届けられない。夫は大丈夫だろうか。そうと考えると自然と涙がこぼれてきて、普段言うことを聞かない、わがまま放題の我が子が愛おしくてたまらなくなつて、今の生活を大切に思うようになり、子供のやんちゃにもイライラしなくなつた』と話されていました。

田村さんのデータによると、遺書を書いた人の九割が、その後、ポジティブな思考になつたとのこと。自分が亡き後、家族や友人にどんな言葉を残すかを考えることは、自分の生き様、死に様を真剣に向き合い考

私達はこの世に生まれ存在する故に、いずれは死を迎え、消滅していく身であります。生と死を切り離すことは出来ません。

曹洞宗でお唱えするお経である「修証義」。その冒頭に「生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」とあります。「死」を見つめ、そして、今ある「生」をしっかりと見つめよと教えているのです。

私達はこの世に人間として生まれてきました。理性があり、あらゆる感情をもち、あらゆる表現ができ、ルールを作りまた守ることができ、全てのものに慈しみを持つことができ、正しい行いをする事ができます。

今この瞬間を生かされていることに感謝し、一日一日を大切に送りたいものです。

高知県予岳寺 濱田道圓師
令和四年一月十一日〜二十日

◆繋がる思い

先日、お勤めの移動中にラジオを聞いておりました。それは、子供たちの疑問や

質問に、著名な学者や先生、時にはオリンピックのメダリストの方が質問に答えるという番組でした。

ある小学生が脳科学者の先生に、次の様な質問をしておりました。「先日、お父さんとお母さんとお寺にお墓参りに行きました。ご先祖さまは僕たちのことを守ってくれているのですか？」と。どう答えるのかと非常に興味深く聞いておりましたら、先生のお答えは、「人間は人智を超えた存在を信じることで、安心と自信を得られるという脳の働きがあります。神仏や祖先の存在を信じ、加護を願うという、その働きのお蔭で、先人たちは過去の様々な災害や戦争、疫病や貧困を乗り越えられたのです」ということでした。

ところで、親の七光りという言葉があります。七つの光とはどのような光なのか調べましたら、七は数そのものではなく、無数のとか、数多くのという意味でした。私たちの命は数え切れないご先祖さまからの命の連続の結果であります。五代遡

れば三十二人、十代遡れば千二十四人、数多のご先祖さまの一人お一人の存在があったことを、私たちの命が証明しているのです。

私たちは、小さな子供を見ると無意識に可愛いと思いい、無事な成長を願います。健康でいて欲しい、そして幸せになつて欲しい。困難な時代、不遇な境遇の中であつても、その思いが親から子へ繋がって、今の私たちが存在しています。我々はご先祖さまのそんな思いを受けて生まれたのですから、ご先祖さまから守られているのだと言えるのではないのでしょうか？

道元禅師様は『仏道をならうというは、自己をならうなり』と告示されております。自分の命につながる大勢のご先祖さまに思いを馳せ、自分自身の今の有り様を見つめ直し、時には反省し、より良い生活を送ること。これも立派な仏道修行でありましょう。

朝のひととき、夕べのひととき、お仏壇の前で手を合わせ、息を調え、姿勢を調え、心を調えて、毎日を

丁寧にごしてまいりましょう。

高知県予岳寺 濱田道圓師
令和四年一月二十一日〜三十日

◆仏縁をいただいて

先日、久しぶりに亡くなった師父の夢を見た。

行き詰ったとき、やるこゝとが十全に出来ていないときに夢に出てきては叱ってくれていた。最後に夢に見たのは十年前くらいだろうか。

私が十五歳の時に師父が亡くなり、半ば流されるような形でお寺を継ぐことになった。

何もわからない私を優しく受け入れ導いてくださったのは、いつも師父と一緒に坐禅をされていた近所の和尚さん達だった。

素晴らしい先輩方に恵まれ、多くの仲間に出会うことが出来、檀信徒の皆様にも支えていただき、今は住職をつとめさせていただいている。様々なご縁の中で、お坊さんでよかったと心の底から思えるようになった。

本当にありがたいことだと思ふ。

今振り返ってみると、師父は早くに亡くなったことで私に深い仏縁を残してくれたのかもしれない。もちろん母は苦勞した筈だし、先に息子を送ることになった祖母の悲しみは私にはとても想像に尽くせない。

以前は師父が居てくれればと思つたことも、どうして自分が、とへそを曲げたこともあつたけれど、いただいたご縁を大切にし、前に進むことでしかこの恩に報いることが出来ないと思ふ。

今年は師父の二十五回忌にあたる。歳は随分近くなつたけれども、その背中はまだまだ遠い。

十年ぶりに夢に見た師父は怒つてもいなかったけれど笑つてもいなかった。いつかまた会うことがあるのであれば、その時は胸を張つて、笑顔で迎えてもらえようなお坊さんでありたい。

瑞應寺専門僧堂監事 古川承久
令和四年二月一日〜十日



■ 涅槃摂心

二月五日より五日間、恒例涅槃摂心を修行。一山竜象衆、釈尊報恩の只管打坐。会中は門原後堂（従容録）、金岡監録（仮名法語）、吉松維那（伝光録）と法を得る。供養点心菓子等、会中の施主に深謝。

令和四年涅槃摂心 供養施主

当山 総代会 殿

今治市 禅興寺 殿

愛知県 森川法雲 殿

四国中央市 正覺寺 殿

愛知県 宝泉寺 殿

松山市 義安寺 殿

広島県 長福寺 殿

広島県 東光寺 殿

鳥取県 玉泉寺 殿

岡山県 中興寺 殿

岡山県 西林寺 殿

今治市 善福寺 殿

今治市 實法寺 殿

岡山県 安正寺 殿

他、野菜、果物、菓子等、多数頂戴。
(順不同)

■ 金毘羅初大祭

二月十日（旧一月十日）は当山鎮守金毘羅大権現初大祭。午前十一時に上殿して山門鎮静、修道無難を祈願。

■ 冬安居解制・涅槃会

釈尊入滅の聖日、涅槃会と併せ冬安居解制。首座山内浩紀（慧岳）士と佛山一衆、乳水和合の辨道嚴修。

二月十四日、土地堂念誦、涅槃会速夜。十五日、曉天、祝禱朝課、鎮守諷經に次いで、涅槃会献粥。規範に準じ、小参・人事行礼を修行。



土地堂念誦

白眉殿進捗状況

写真の通り工事が進んでおります。



涅槃会

午時、門原後堂導師のもと、ひかり園児と合山衆で涅槃会正當諷經。

二月の日鑑

- 一日 祝禱
- 五日 涅槃摂心（九日迄）
- 十日 金毘羅初大祭（旧一月十日）
- 十四日 土地堂念誦
- 十五日 涅槃会速夜諷經
- 十五日 祝禱・小参・人事行礼
- 十五日 涅槃会献粥諷經
- 十五日 涅槃会正當諷經
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿八日 略布薩

銀杏感謝録

- 長野県 大輪寺 殿
- 広島県 海蔵寺 殿
- 新潟県 広蔵寺 殿
- 愛知県 洞隣寺 殿
- 愛知県 高橋剛 殿
- 京都府 太慶寺 殿
- 愛媛県 高橋英子 殿
- 広島県 無量寺 殿
- 島根県 福応寺 殿
- 愛媛県 宝蔵寺 殿
- 岡山県 尾崎治子 殿
- 香川県 矢野征郎 殿
- 東京都 常林寺 殿
- 高知県 閑慶院 殿
- 広島県 神原泰子 殿
- 千葉県 新井寺 殿
- 東京都 五十嵐文夫 殿
- 大分県 加藤秀一 殿
- 静岡県 渡部忠 殿
- 山口県 安禅寺 殿
- 青森県 阿部宏 殿
- 愛媛県 森實陸郎 殿

（令和三年十二月三十一日受付迄）

三月の予定

- 一日 祝禱
- 八日 参玄会（十日迄）
- 十五日 祝禱
- 常楽会（おねはん）
- 略布薩
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿一日 萬霊塔（永代墓）供養
- 卅一日 略布薩



鐘 声

コロナ禍中、少人数での冬制中。

首座の任を務めあげることができたが、役寮の皆様方、同安居等たくさんの方々のご協力を賜り、二月十五日、無事解制を迎えることができた。

この頂いたご恩をどのように返していけばよいのか、答えは見つかっていないが、感謝の気持ち忘れず、一生懸命修行に精進し、答えの模索しながら、少しでも恩返しできればと思います。

堂行寮 慧岳